

第六章 ナース暴走

闇司祭「さあて、被検体ちゃん、私と楽しい楽しい実験をしましょうね♪」

マリナ「嫌よ。いまのあなたに身体をいじらせたら、どうなるかわかったものじゃないわ」

闇司祭「怯えないでいいのよ？ あなたもこっち側に来られるようにしてあげるって言ってるだけなんだから」

マリナ（厄介なことになったわね。止める以外に、私が無事で済む方法なんてないじゃない。止められればの話だけど）

ナース「何事ですか？ 診察室には、マリナ様が……」

闇司祭「あら、自ら餌場に飛びこんでくる人がいるだなんて」

ナース「すぐに先生を呼びます」

闇司祭「そうはさせないわよ」

【闇司祭、ナースをベッドへ押し倒す】

ナース「うくっ……」

闇司祭「はーい、マウントポジション♪」

ナース「やられました。私としたことが」

闇司祭「んふふっ♪ 被検体ちゃんより先に、ナースちゃんを手籠めにしてあげる♪」

マリナ（ターゲットがあつちに移ってる。いまなら、逃げ出すチャンスかも）

闇司祭「被検体ちゃん？ いまのうちに逃げ出そうとか考えちゃダメよ？ 第一、ここにはもうひとりいることだし」

マリナ「おとなしくしていると言うのね」

闇司祭「手伝ってくれてもいいのよ？ もし手伝ってくれるなら、その間の無事は保障するわ」

マリナ（おとなしく従ったほうがよさそうね）

マリナ「わかったわ。そのナースを、さっきみたいな快樂責めにすればいいのよね？」

闇司祭「そういうこと♪」

ナース「司祭様とて、先生にこの悪事が知れたらタダじゃ済みませんよ？」

闇司祭「パトロンに楯突くなら、それまでね。私は暴徒になっているのだし、怖いことはないわ」

ナース「……いいでしょう。しかし、私もこの病院に勤務するナースです。簡単には参りませんよ」

闇司祭「それは、やってみてからのお楽しみね♪」

マリナ「お薬も使うのよね？」

闇司祭「もちろんよ♪ 手際のいい子は大好き♪ こっちに来なさい。キスしてあげるから」

マリナ「遠慮するわ」

闇司祭「ダメよ。あなたの手際のよさに、キスで応えたいの。だから来なさい」

マリナ「くっ……」

闇司祭「はい、ちゅっ……ちゅっ、んちゅっ……ちゅむっ、ちゅう……」

マリナ「ちゅっ……むちゅっ、ちゅむっ、ちゅぷっ……」

闇司祭「ちゅっ、れるちゅっ……ふあぁっ……んふふっ、このあともサポートお願いね♪」

ナース「ずいぶんと、節操なしになりましたね」

闇司祭「あら？　キスは報酬になり得ないかしら？　ナースちゃんなら、先生からのキスはご褒美よね？」

ナース「べつに色っぽい関係ではありませんが……」

闇司祭「あらあら、照れちゃって。尊敬する先生だもの、当然と言えば当然よね。でも、いまから私の快樂責めでえっちなことしか考えられなくてあげるわ。まずは、このチンポを勃起させるところから。どんなふうにいじられるのが好きかしら？　カリ首？　裏筋？　それとも、先っぽ？　どこでも、好きなどころを愛撫してあげるわよ？」

ナース「特に、ありません……」

闇司祭「じゃあ、スタンダードに竿から……握って、ゆっくり上下に……シコシコ、シコシコ……」

ナース「んっ……んふっ……んくっ……んう……」

闇司祭「我慢してもムダって、あなたならわかっているはずだと思うけど」

ナース「わかっていても、屈することはできません。先生に顔向けが……んっ……できな
くなります……んう……」

闇司祭「私にも、そんなことを言ってくれる人が欲しいわね。被検体ちゃんが、そう
なってくれると嬉しいんだけど……」

マリナ「これまでの自分の言動を知ったのかしら」

闇司祭「当然そうなるわよね。だから、あなたの先生への気持ちを踏み躪ることにする
わ。普通にいじるだけで勃起しないなら、裏筋を、タマタマのほうから、指先だけで……
つつう……」

ナース「あつ、んっ……っ」

闇司祭「反応が良化したわ。これを繰り返したら勃起しそうね」

ナース「あふっ……んくっ……っ」

闇司祭「我慢しない、我慢しない。すればするほど、つらい時間が長くなるだけよ？ 勃

起して私にいじめられちゃえば、楽になれるのに」

ナース「んんう……んふう……くっ……うくっ……っ」

闇司祭「案外、辛抱強いのね。じゃあ、息を吹きかけながら……ふうく、ふうく」

ナース「んふあっ、はあっ……っ」

闇司祭「声が少し色づばくなったわ。チンポも芯が硬くなってきた。もうひと息ね……ふうく、ふうく」

ナース「んくっ、あっ……んあっ……っ」

闇司祭「んふふっ♪ もう半勃ちよ？ ここから先は早いって、あなたもわかるわよね？」

ナース「くっ……でも、抵抗を……」

闇司祭「握りやすくなったから、また握って……シコシコ、シコシコ、シコシコ……」

ナース「ふっ、はっ、はっふ……あっ……！」

闇司祭「ほおら、ムクムクしてきちゃった♪ あとはペースを上げて力を入れて……シコ

シコシコシコ」

ナース「くううつ……んっ、あぁっ……！」

闇司祭「はーい、勃起チンポのかんせーい♪ チンポって残酷よね。どれだけ嫌がっても、刺激があつたら勃起しちゃうんだもの」

マリナ「あの、私はなにを……」

闇司祭「この子へのお返しをすればいいんじゃないかしら？ チンポは私が責めるから、チンポ以外で」

マリナ「じゃあ、乳首を……」

闇司祭「毒液、好きに使っていいわよ♪ 私も手コキに使うから。単純なシコシコだけでもつまらないでしょうし」

ナース「やられる側というのは、こういう気持ちなんですね。よくわかりました」

マリナ「それは、私に言ってるの？ いまさら遅いんだけど」

闇司祭「そうね。まあ、いっそのこと楽しみなさい。快楽責めである以上、気持ちいいのは確かなんだから。じゃあ、毒液を両手に塗って、全体に伸ばして……見えるかしら？

両手の指を絡めて、手のひらの土手を合わせると、間に隙間ができるの。ここに、あなたのチンポを入れて……」

ナース「はうつ……あつ……!!」

闇司祭「おててマンコに、チンポ挿入完了♪ この状態でチンポを締め付けたまま、上下に動かして……クチュクチュ、クチュクチュ……」

ナース「あくつ、んくつ、んんっ……ずいぶん乱暴なしごき方ですね……んっ、んくう……」

闇司祭「毒液がヌメヌメしてて、痛みはないでしょう？ だったら、これぐらい乱暴なほうが気持ちいいに決まっているわ。クチュクチュ、クチュクチュ……カリのでっぱりをいじめるみたいに……クチュクチュ、クチュクチュ」

ナース「ひくっ、あくつ……ひつくう……んくつつ……」

マリナ「こっちも始めるわよ。あなたには、おちんちんだけじゃなくて乳首もいじられたから。唾液を垂らして……」

ナース「んひっ……!!」

マリナ「冷たかった？ それとも、もう感じてる？」

ナース「そのようなことでは……あつ、んっ……おちんぽが……っ！」

闇司祭「乳首に気を取られていたら、簡単にチンポがイっちゃうわよ？　ちゃーんと、両方ケアしないとね」

マリナ「いい機会だし、私がどれだけつらかったか味わいなさい……んちゅっ、ちゅっ、れろれろっ、れろっ、んれろっ……乳首も勃起させて、おちんちんまで我慢できないようにしてやるんだから……れろろ、れろろ、んふう、ふう……れるっ、んれるるっ……」

ナース「くふう……はあっ……想像していたよりも、確かにつらいですね……しかし、我慢できないほどでは……」

闇司祭「そう、余裕なのね。だったら、手の締め付けを強くして……クチュクチュクチュクチュっ！」

ナース「はふっ、あつ、ん、あ、いあっ……んっ、あああああっ……んつくう……あああっ……亀頭が、こすれて……んあああっ……！」

闇司祭「んふふっ♪　さっきまでの余裕はどこへ行ったのかしら？　つらそうに喘いじやってるわよ？」

ナース「くっ……まだ、これなら……」

マリナ「んちゅっ、ちゅっ、れろれろれろっ……！　あなただって、乳首は性感帯でしよう？　れろっ、んれろっ、れろれろれろっ……こんなに勃起させたら、おちんちんにも響いているはずよ」

ナース「開発など、されては……ひああっ……！」

マリナ「やっぱり感じてるじゃない……ぢるるるっ、れろっ、れろろっ、はぷっ、んぷっ……あむあむっ……歯を使って、甘噛みして……ああむっ」

ナース「んくつつつつ！」

闇司祭「いまのはかなり感じたみたいね♪　チンポが天を衝くように跳ねたわよ？」

ナース「はあ、はあ……このままでは、快感に流される……でも、歯を食い縛れば……」

闇司祭「亀頭が敏感なのがわかってるんだから、そんなことをしてもムダよ？　手の動きを小刻みにして、亀さんだけを……グチュグチュグチュグチュっ！」

ナース「ああああんっ！」

闇司祭「んふふっ♪　いい喘ぎ声ね。それをずっと聞きたいわ♪　グチュグチュグチュグチュっ！」

ナース「あんっ、あつ、あん、あんっ、ふあつ、ひうつ、んくつ、ああああっ……!!」

闇司祭「もつとよ、もつと! グチュグチュグチュグチュっ!」

ナース「んいっつ、はあんっ、んあんっ、ひあつ、はうつ、んくつ、あああつ、ひああんっ!」

闇司祭「いいわいいわ♪ たんまり感じて、チンポが我慢汁を出して、射精を準備を始める♪」

ナース「うあつ、ああんっ、んおっ……おおっ……あぐっ、ふんぐっ……!!」

闇司祭「イモムシみたいに身をよじって、すごく気持ちよさそうね♪ いまなら、毒液もすんなり受け入れるんじゃないかしら?」

ナース「薔薇の毒だけは……ひううつ、あああうつ……それは、やめてください……んっ、ああっ、司祭、さまあ……」

闇司祭「許しを乞う姿はかわいいけれど、毒液の注入は決定事項よ。止められないわ」

ナース「そんな……いま、なら……んっ、あう……先生にも、このことは黙って……んんんっ!」

闇司祭「必要ないわ。先生のほうも、同じ目に遭わせればいいだけだもの……んふふっ♪」

マリナ「注入器、使うなら使いなさいよ」

闇司祭「ちょっと素直じゃないのがマイナスポイントだけど、使わせてもらうわ。勃起して、大きくなってる尿道口に、先端を差し込んで……」

ナース「あふっ……奥まで、注入器が……あああっ……!!」

闇司祭「このまま動かしてあげるのもいいかもね……グリグリグリっ♪」

ナース「んおおおっ……!! おおおおんっ……!! んおっ、おおおっ!!」

闇司祭「あらあら。尿道内部への刺激でも、こんなに感じちゃうのね♪ これをもっと感じられるように、毒液を注入してあげるわ♪ びゅくくくくくっ♪」

ナース「ひぐううっ……!!」

闇司祭「まだまだ注ぐわよ♪」

ナース「あふうっ、んあああつ、ひぐつつ、んぐっ……んおおっ、おおおっ……!!」

マリナ「溢れるまで注ぐのよね」

闇司祭「もちろんよ。それぐらい注がないと、意味がないもの」

ナース「ひいひいひいひい……おちんぽが、中が熱い……っ！ ああああっつ、んんぐっ……おちんぽ、ダメになっちゃう……射精どころじゃなく……尿道が溶けてなくなっちゃおう……っ！」

闇司祭「そんなことはないわよ。媚薬効果が出るだけで。第一、ここにひとりいるじゃないの。たっぷり注がれまくったのに、五体もチンポも満足な状態の人が」

マリナ「私に注いだ分だけ、お薬のつらさを味わったわいわ」

ナース「ひぐっっ……んぐぐっ……ひとでなし……はあ、はあ……っ！」

闇司祭「嫌ね、そんな暴言吐いて。せっかく、チンポの血管が脈打って太くなってるのに♪」

マリナ「お薬、溢れてきたわね」

闇司祭「そろそろ満杯みたいね。引き抜いてあげないと」

ナース「んあつつつっ！」

闇司祭「感じてる感じてる♪ 毒液のおかげで感度が上昇してるでしょうし、しごき方を
変えましょうか♪」

ナース「ふう、ふう、ふう……」

闇司祭「そんなに睨んだって、もう毒液は身体の中よ？ ここまで来たら楽しんだほうが
勝ちだと思うのだけれど……んふふっ、チンポをしごいてる私が、快楽に染め上げてあげ
ればいいだけね。こんな感じで、両手でチンポを握って、雑巾を絞るみたいに……ギユ
チュギユチュ、ニユルニユルっ！」

ナース「んおおおっ！ ほおおっ！ んおっ、おおおっ！ おおおんっ！」

闇司祭「あら、やっぱりこれは特別な刺激になるのね。止まらずに続けてあげるわ。ギユ
チュギユチュ、ニユルニユル、ギユチュギユチュ、ニユルニユルっ♪」

ナース「はぐっ、ああっ、んおおっ、おおおんっ！ んおっ、おおおっ、あああああっ……
んおっ！ んおおっ！」

闇司祭「気持ちいいからって、腰を突き上げたらダメじゃない」

ナース「ひぎっ、んぐっ、おおおっ！ んおっ！ ほおっ……！ ほお、ほお、ほお……

んおおおおっ！」

マリナ「零れたお薬もらうわよ。こつちにも塗りたくってあげないと」

ナース「あぐっ、ひぐっ……いま、乳首に塗られたら……」

マリナ「れろれろれろろっ！」

ナース「んんんんつつっ！」

闇司祭「んもうっ♪ 暴れ過ぎよお♪ そんなに暴れなくても、射精はさせてあげるわよ？ ちゃんと、イクうとか出ちやううとか言ってくれれば」

ナース「ひうつ、ああっ、んおおおっ、ほおおおんっ！」

闇司祭「意地でも言わない気でいるのね。いいわ、だったら毒液を追加するだけだから♪」

ナース「や、やめ……んんんんっ！」

闇司祭「言うのが遅いから、もう突っ込んだじゃったわ♪ それ、注入♪」

ナース「んおおおおおっ……！」

闇司祭「注入してる間も、同じようにしごいてあげるわね♪ ギュチュギュチュ、ニユルニユル、ギュチュギュチュ、ニユルニユル……カリのくびれに指を這わせながらあ……ギュチュギュチュ、ニユルニユルっ♪」

ナース「んおおっ、ほおお……ほおう、んおおんっ！」

マリナ「淡々と私をいじめてたときは大違いね……れろろっ、んれろっ、れるっ、れろれろっ」

ナース「ひぐっ、んおおっ、ほおお、おおおんっ！」

闇司祭「ギュチュギュチュ、ニユルニユル、ギュチュギュチュ、ニユルニユルっ♪」

ナース「ひああっ、んいっ、んおおっ、おおおとおおっ……！」

マリナ「れるるるるっ、んれるるっ、れう、れるっ、んちゅっ、れるるるっ！」

ナース「ひいひいひっ……おおおっ、おおんっ、んおおっ、おおおおっ！」

闇司祭「どこでも感じるようになっていそうね♪ あ、一応これは抜いてあげる♪」

ナース「くひっっ！ ひい、ひい、ひい、ひいひいんっ！」

闇司祭「あら、イっちゃったかしら？ 精液は出てないけれど……寸でのところで抑えたのね。出してくれちゃったほうがよかったんだけど……いいわ、もう一回注入しましょう」

ナース「ひっ……！ らめえ、れすう……司祭、しゃまあ……もうっ、おちんぽ……ほお、ほお……らめえ……っ！」

闇司祭「そう言われたら、注入しないわけにいかないわ♪ はい注入っ♪」

ナース「おおおおおおおんっ！ おおっ、おおおっ、おおおおおんっ！」

マリナ「これだけ喘いで、まだ出したいと言わないのね」

闇司祭「すぐに言うようになるわ。チンポは破裂しそうなほど膨らんでるし、我慢汁も止まらない状態だもの。精液が滲み出る副作用は確認できてないけれど、本心ではすぐに射精したいって思ってるはずよ」

ナース「ひくっ、くふあっ、あああっ……それは、言わない、れすう……絶対、にい……言わ、ない……あなたの、一方、的、責めには、屈し、ない……あふ、あふう、あふう……っ」

闇司祭「気概はいいけれど、身体はどうかしらね。注入器を抜いて、最後の仕上げに移る

わよ」

ナース「んおおっ……！　さい、こ……」

闇司祭「やっと終わるとか思ったら大間違いよ。ここからが、一番快感があるんだから♪
まずは、チンポを咥えて……ああむっ、じゅぷりゅっ、じゅるるっ、んじゅるっ……先っ
ぽをフェラしながら、竿を手で……んじゅるっ、れるじゅっ、じゅっ！」

ナース「らめえっ……！　おちんぼ、亀頭も竿も感じしゅぎてえ……ほお、ほお、ほお……
イクっ、らめえ……おちんぼイクうっ……おちんぼイクっ、おちんぼイクっ、おちんぼ
イクっ、おちんぼイクっ……！」

闇司祭「ほら……じゅぷりゅっ、じゅりゅじゅりゅじゅりゅっ……！　毒液をたっぷり注
がれたチンポに、手コキフェラは刺激が強過ぎるでしょ……じゅる、んじゅるっ……シコ
シコ、シコシコ……むじゅるっ、じゅろじゅろっ……！」

ナース「らめえ……らめえ……おちんぼ取れちゃうう……溶けてなくなっちゃうう……司
祭、しやまのお、お口でえ……んおっ、おおっ、おおおおっ、おおおおんっ！」

マリナ「すごいやがりようね。私でも、ここまではやがらなかったかも」

闇司祭「似たようなものだわ」

女医 「ちょっと、何事！」

ナース 「あ……しえんしええ……私、おちんぼイキそうでえ……」

女医 「どういことよ！ どうして、司祭と被検体がその子を責めてるわけ？」

闇司祭 「いまいところだから、邪魔しないの……んじゅっ、じゅるるっ、れるじゅっ、ぢゅろぢゅろぢゅろぢゅろっ！」

マリナ 「悪いけど、邪魔させないわ。このナースだって、射精できなかったらつらいだけよ」

女医 「くっ……！ やりやがったわね、このド腐れ司祭！」

ナース 「しえんしええ……怒鳴るのもいいれすけど……私をイカせてくだひやいい……もう、おちんぼ限界なんれうすう……」

闇司祭 「というわけだから、この子をイカせるまで待ちなさい……じゅぷじゅぷじゅぷじゅぷっ！」

ナース 「んおおおっ！ イクうっ……精液出るっ……おちんぼ気持ちよくて、精液でるう……っ！ お、んおっ、おおおっ、おおおおおっ！ イクっ、イクっ、イクうっ、おちんぼイクうううううううっ！」

闇司祭「んぷっ……！ んぷっ、んぷ。ぷぷっ！ んぷっ！ すっごい勢い……喉奥にビュクビュク当たって……」

ナース「おっ、お、おおっ、んおおっ……射精、気持ちいい……射精、射精……びゆるびゆる気持ちいいれすうう……っ！」

闇司祭「全部出しなさい……じゆるるっ、じゆるっ……んく、んくっ……私が飲んであげるから……じゆるるるるっ、んく、んく……んく、んく、んく……」

マリナ「すっご……こんなに飲んでるのに、口から零れてきてる」

闇司祭「量が多過ぎるのよ……じゆるっ、れえろっ……んく、んく……じゆるうっ、んく……じゆるるるっ、んく……」

ナース「はあ、はあ、はあ、はあ……精液、飲まれるのも気持ちいい……いっぱい飲んでくだひゃい、司祭しゃまあ……」

闇司祭「言われなくても、飲んでるわよ……んく、んく、んく……」

女医「くっ……指を咥えて見てるだけなんて……」

闇司祭「いいじゃない……んく、んく……かわいい部下の射精シーンよ……ぢるるるっ……」

…せっかくだもの、目に焼き付けておいたらいいわ……んく、んく、んく……」

ナース「はあ、はあ、はあ……射精、終わっちゃいましたあ……」

闇司祭「ふああああっ……！ はあ、はあ……十分出したから大丈夫よ」

ナース「そう、れすかあ……はあはあはあ……」

女医「もういいわよね。どうしてこんなことになったのか、教えてちょうだい」

闇司祭「まだよ。本当の仕上げに、毒液の注入があるから」

ナース「……また、注入う……？」

女医「やめなさい……！」

闇司祭「遅いわ！」

ナース「んおおおおおおおっ！ 入って、くりゆう……！ ドクドクう、ドクドクう……気持ちいいおくしゅりい……いつばいいい……ひい、ひい、ひい、ひい……あああああっ！」

女医「くっ……完全に壊れてるじゃないの！」

ナース「こわれて、ないれすう……気持ち、いいられえ……んんっ！ な、なんか出そう……また射精……でも、違う……これ、精液じゃない……オシッコでもなくて……はあはあはあ……っ！」

闇司祭「注入器を抜くわ。我慢しないで出しなさい。ぷしゅって、噴水みたいに出してもいいわよ。それっ♪」

ナース「んおおおおおおお……！ ほお、ほお、ほお……熱いの、出て……んおおお……！ らめえ……気持ちいい……はあはあはあ……おおおおお……！！」

闇司祭「潮吹きだわ♪ 言った通り、噴水みたいに撒き散らしてる♪ ここまで感じられていたのね。こういうのを見ると、責め尽くした甲斐があつたって思えるわ」

マリナ「初めて見るかも……こんなになるのね、潮吹きって」

闇司祭「じっくり見ておきなさい。私でも、そうそう見られるものじゃないわ。ここまで見事に吹き出してるのは、私も初めてなくらいよ。こんなに貴重な人材が、近くにいたなんてね」

女医「他人事だと思って……！」

闇司祭「実際、他人事じやない」

女医「わたしにとっては、大切な部下で欠かせない存在よ。あなたとは、この子に対する感情が違うの」

ナース「はあ、はあ、はあ、ああああ……んああああ……出たあ……気持ち、いいのお……ほお、ほお……ほお……しえんしえもお、見てくださいましたかあ……私の、初めての、潮吹き……おちんぽからあ、透明のおつゆがあ、ぷしやーって……」

女医「見たわよ。でも、嬉しいことじゃないわ」

ナース「どう、して……？ 私、こんなにえっちになったのに……しえんしええは、こういうナースはキライなんれすかあ……はあ、はあ、はあ、はあ……」

女医「好きとかキライとかの話じやないわよ」

ナース「そう、れすかあ……はあ、はあ、はあ……あう」

女医「なっ……！ し、しっかりしなさい！ こんなんで、失神してはダメよ！」

闇司祭「しばらくは、声をかけてもムダよ。沈黙状態に入ったから」

マリナ「沈黙……？」

闇司祭「いまの私のように、暴走する一歩手前の状態ね♪ 眠っていたときのあなたも、沈黙状態だったわ」

女医「どこまで腐ってるのかしらね、あなたは」

闇司祭「腐ってなんてないわよ。自分の正義を貫いているだけだもの。うふふっ♪」

マリナ（このお薬、ヤバいどころじゃないわね。二度と投与されないようにして、ここを抜け出さないと。あと、この司祭を敵に回しちゃダメ。できるだけ言うことを聞いて、媚びてるって思われないように演技をして、無事に過ごす必要があるわ）